実践女子大学 実践女子大学短期大学部

下田歌子研究所 ニューズレター No. 07

2016年6月

『婦人常識訓』再出版作業を終えて

下田歌子研究所 主任研究員
伊藤 由希子

平成28年3月、『新編下田歌子著作集』の1冊目として、『婦人常識訓』を無事出版することができた。ここではその出版までの経緯を、少し振り返ってみたいと思う。

下田歌子の著作を再出版しようという事業は、2014年の冬に始まった。その年4月に下田歌子研究所に研究員として着任する前から私が気になっていたのは、現在では研究者以外の一般の人たちが下田の著作やその思想に触れるきっかけがほとんどないことであった。

下田歌子が、明治から大正、昭和という激動の時代に、世界に開かれたこれからの日本における女性のあり方を考えた代表的人物の一人であることは言うまでもない。そのような下田の言葉の中には、女性の生き方がさまざまに論じられている現代社会においても大切なヒントを与えてくれるものがたくさんある。また、下田の著作は、当時の女性たち、特に女子学生を対象に書かれたものがほとんどであり、その内容はけっして難しくはない。身近で具体的なものごとから離れることなく語られる下田の文章からは、当時の人々の生活のありさまや考え方が手に取るように感じられ、現在の女子学生・女性たちにとっても興味深いものであることは間違いない。しかし、その著作のほとんどが絶版となって久しい現在、下田の文章に直接触れる機会はほとんどないと言っていい。

たしかに、図書館で昭和初期以前の発刊当時の古い本を探したり、インターネットの国立国会図書館デジタルコレクションで下田の著作にアクセスしたりすることはできる。だがそれらをいざ読もうとしても、文語調の文章や旧漢字・旧仮名づかい、そして読む前提として必要とされるさまざまな知識といった壁に阻まれて、ほとんどの人はあきらめてしまう。

そこで私は、着任前から下田著作のデジタル化作業を進め、それを多くの人に読んでもらう方法を模索していたが、2015年度の事業計画を立てる際に『新編下田歌子著作集』の発行事業を提案し、承認されたところから、このプロジェクトは具体的に動き始めた。

新編著作集の第1巻に選んだのは、下田が女性の生き方についてさまざまな切り口から論じた大著、『婦人常識訓』である。この本は『下田歌子著作集　香雪叢書』第4巻として昭和8（1933）年に出版されたもの

『新編下田歌子著作集　婦人常識訓』と『香雪叢書　婦人常識訓』

で、その原著である『婦人常識の養成』は明治43（1910）年に出版されたが、『香雪叢書』に収められた際に下田自身があらたに全面的に手を加え、その内容を変更した箇所も少なくない。下田がその3年後、昭和11（1936）年に83歳で没していることを考えれば、この本は下田思想の集大成の一つと言えるであろう。

この本を再出版するに際して基本方針として据えたのは、「学園の大学生・高校生が読めるようなかたちにする」ということである。学園の学生・生徒たちは学祖・下田歌子についての講話を聴く機会も少なくないが、下田が実際にどのようなことを語っていたかということまで直接触れることは、ほとんどない。下田に興味を持った学生・生徒がちょっと読んでみようと思える本を、そして広く社会の人に下田歌子の考えに触れてもらえるきっかけを、ということで、具体的には以下のような方針で作業を進めた。

- 読みやすいように現代的文字づかいにあらためる（旧漢字を現代通用漢字に、旧仮名づかいを現代仮名づかいに）。また、原文では漢字表記になっていても、現代では平仮名表記が一般的なものはあらためる
- 原文を尊重し、句点・読点、表記ゆれはそのまま残す
- 漢字表記でルビの可能性がいくつかあるものは、もっとも適当と思われるものを採用。読者に任せてしまってよさそうな点は、できるだけルビをふらない
- 注はその言葉の初出時のみに付し、知識の少ない大学生・高校生でもわかるような説明にする

いざ作業を始めると、現代的文字づかいにあらためるだけでもかなりの大仕事であったが、さらに苦労したのは、ルビの選択であった。下田の他の著作では、ある漢字に対して一般的な読み方とは異なるルビがふられている場合が少なくない（「那辺」を「どのへん」、「乳汁」を「ちち」など）。『婦人常識訓』の原文はこのように読み方を迷うようなものにもルビがふられていない場合が多く、原著『婦人常識の養成』に照らし合わせながら一語一語確認したものの、『婦人常識訓』でふってあるルビと『婦人常識の養成』でふってあるルビが異なる場合などもあって、『婦人常識訓』執筆時点で、下田がどのような読みを想定していたかは結局特定できないため、何度も検討を重ねながら、もっとも適当と思われる読みを採用することにした。

そして何よりも大変だったのは、注の作成である。「知識の少ない大学生・高校生でもわかるような説明にする」ということで、かなりの数の言葉に平易な注をつける必要があったが、特に難渋したのは、現在ではほとんど知られておらず、私自身も初めて聞くような人物についての注である。『婦人常識訓』には、事典等を何冊も調べても載っていないような人物が、例として多々挙げられている。下田がこの本を執筆した当時はおそらく人口に膾炙して、説明をするまでもないような人物とその事績だったのであろうが、現在ではそのような人物への手がかりがほとんどないことに、数十年の時間と敗戦を経た社会の変化を痛感した作業であった。

当初想定していたよりもはるかに難しかった以上のような作業に手間取り、原稿作成が大幅に遅れ、編集・出版を依頼していた三元社のみなさんには、かなり厳しい日程での作業をお願いすることになってしまったが、何度も丁寧に原稿を見ていただいた研究所担当の安達勉常務理事他研究所のみなさんのご助力もあって、なんとか年度内の出版にこぎつけることができた。

はからずも、昨今の出版業界では、齋藤孝氏による福澤諭吉の『福翁自伝』『学問のすすめ』『文明論之概略』現代語訳をはじめ、明治から昭和初期の書物の現代語訳の出版が一つのブームになっているという。過去の時代の思想を「古いもの」として切り捨てるのではなく、過去の人々の思想の蓄積から現代を生きる上でのヒントを探っていこうという温故知新の姿勢を持つ人が増えているということだろう。そういう流れの中で出版することができた下田著作が多くの人の目にとまり、下田の思想に興味を持つ人が出てきてくれればと思っている。

なお、『新編下田歌子著作集』の続刊として、今年度は『女子のつとめ』、来年度以降『良妻と賢母』『女子の心得』『結婚』の出版を予定している。

岩村町婦人会から岩邑うた子会へ（1）
――創立から終戦までの下田関連事業について――

下田歌子研究所 非常勤研究員
愛甲 晴美

はじめに

岐阜県恵那市岩村町では、長年下田歌子先生（以下下田）の顕彰碑および、墓所周辺の清掃活動が続けられている。この活動は現在、岩邑うた子会の会員の方々によって行われているが、活動の始まりは、同会結成前の岩村町婦人会時代に遡る。

このほど、恵那市教育委員会のご協力を得て、岩村町婦人会資料（以下婦人会資料）を調査し、また、同婦人会役員を歴任された方々および岩邑うた子会の現役員の方々への聞き取り調査を行った。

婦人会資料は、創立当初から平成16年の町村合併による解散までの日誌や記録簿、収支簿、アルバム等大量であり、精査には時間を要する。今回は創立時から終戦までの婦人会の概略および、新たに判明した下田関連事項を紹介する。

創立から終戦までの岩村町婦人会

岩村町婦人会は明治39年6月26日「岩村町教育会婦人部会」の名称で創設された。初代会長は巌邑小学校鷹見豊次郎校長が就任し、大正13年まで小学校長が会長を務めた。

大正10年5月に規約改正があり、名称を「岩村町婦人会」と改め、さらに大正13年6月に会員の中から会長を選出することが定められた。

以降、昭和3年から同28年まで務めた鷹見八代会長のもと婦人会の活動も本格化し、婦人講座や講演会の開催、養老住宅の経営など、福祉事業にも取り組んでいった。その後、恵那郡聯合婦人会、大日本国防婦人会岩村町分会、愛国婦人会岐阜県支部恵南十三ヶ町村支部が結成されたが、昭和17年に3団体が解散し、大日本婦人会岩村町支部が結成された。終戦直前の昭和20年6月に同会が解散し、新たに設立した岩村町婦人会がその全財産を引き継いだが、終戦により、戦後復興に向け新たな活動が始まった。

下田関連事業について

婦人会資料に最初に記録されている下田関係事業は、大正10年7月15日の講演会である。『創立

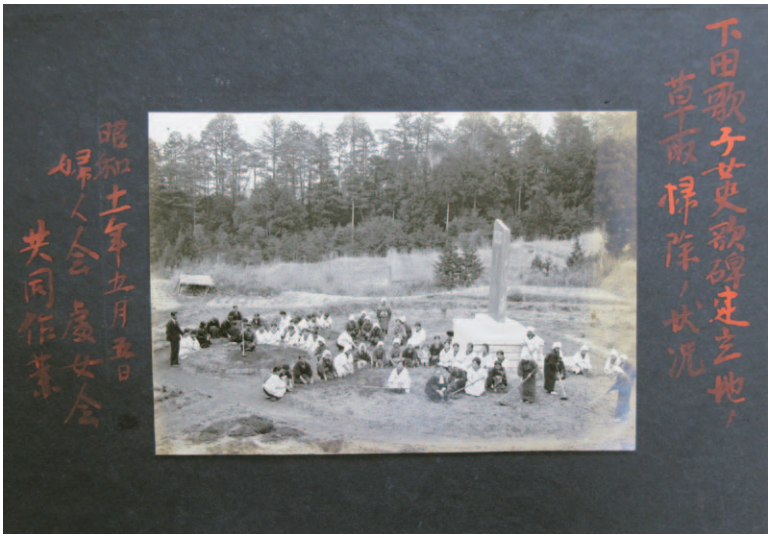

図1 顕彰碑周辺の清掃の様子（昭和11年5月5日撮影） 岩邑うた子会蔵

図2 現在の顕彰碑周辺（平成28年4月27日撮影）

第二号　明治三十九年六月二十六日　岩村町婦人會記録』には講演について次のように記されている（図3）。

大正十年七月十五日／下田歌子女史講演要領／下田女史展墓ノ爲来岩セラレシヲ機トシテ午后／八時ヨリ盛巖寺ニ於テ御講話ヲ乞フ頗ル盛／會ナリ午後十時閉會／要領左ノ如シ／一、時代の変遷に伴ふ女子／一、女子としての社会奉仕／一、生活改善／イ、冗費節約　ロ、時間節約　ハ、労力節約／一、愛國婦人會ノ事業ニ付

図3

下田は明治4年に岩村を離れて以降、3度帰郷している。最初は明治21年の名古屋京阪方面への旅行中であり、2度目が上記の大正10年、3度目は昭和10年の顕彰碑除幕式出席のためである。大正10年については『下田歌子先生傳』に、同年7月23日に父平尾錄蔵の記念碑除幕式参列のため岩村に赴いたとの記載がある（注1）。この記念碑は現在も平尾家墓所にあるが、碑の裏面の刻字には「于時大正八年十月也　録陽斎先生遺文　同門人建之」とあり、記念碑建立と除幕式開催に2年の隔たりがあることに関しては明らかでない。今回の調査では、訪問は展墓（墓参り）のためで、その際7月15日に行われた講演内容も明らかになった。しかし、婦人会資料には除幕式参列に関する記載が見出せず、7月23日の動向は確認できなかった。下田は大正9年9月、愛国婦人会第5代会長に選出され、翌10年は会長として全国各地を遊説し組織の拡大に尽力している最中であった。

次に挙げるのは、『岩村町婦人會経營誌』「下田歌子女史の記念事業」の記載である（図4）。

この記録によって、婦人会が会員の毛髪を集めてその売却費を積立て、顕彰碑前の示標を設置したことが明らかとなった。

顕彰碑は下田81歳の誕生日を記念し、生家の平尾家旧居跡に建立され、昭和10年8月8日には町を挙げての除幕式が催され、下田本人も出席した。顕彰碑建立地は、本学園の記録によれば、財団法人私立帝国婦人協会実践女学校が、所有者であった小出熊蔵氏から地籍の寄贈を受け、昭和56年学校法人実践女子学園に変更登記され現在に至っている。

当初10カ年計画だった婦人会の記念事業も、顕彰碑建立に合わせ7年で実行された。この毛髪を集める事業は、『創立第二号　明治三十九年六月二十六日岩村町婦人會記録』に「髪の毛集め」と記され、昭和3年12月から同10年7月までの間におよそ40回も実施された。積立金総額は前述のとおり、160円63銭にのぼったが、積立金の一部が示標の代金として支払われた。示標については「丈八尺、 巾八寸　代金凡　八拾円　石工、 西尾氏」と記されている（注2）。西尾氏とは、岩村町の本町一丁目で石工をされてい

昭和三、一二、一五
下田歌子女史の事蹟を永久に残すべ／き事業資金造成の爲め十ヶ年計画／的にて會員の拔毛を蒐集し此の賣却／代金を別途預金に積立て其の経費に／充つる事を總會に於て満場一致可決／す　（鷹見會長原案による）
〃九、一二、一五
現在の積立金百五拾五圓六拾七銭
〃一〇、八、八
実践女學校卒業生及在學生諸氏／に依って生レ先の誕生地に壽碑建立され／除幕式擧行に際し積立金を以て同／場所の入口に石造の示標建立す／右積立金總額金百六拾円六拾参銭也
〃一一、三、三
今後ハ毎月十五日の一回宛役員交代にて／出動し顕彰碑週（原ママ）囲の除草及び清／掃を行ふ

図4

た西尾専一氏とのことである(注3)。

当時女性の髪は、昭和初期に鬘が流行したこともあり、需要も多かったと推測される(注4)。しかし、地方ではまだ断髪が浸透していない時代に、女性が髪を切ることには抵抗があったであろう。岩村の女性にとって、この事業に提供された髪は単なる売り物ではなく、思いのこもったものであったにちがいない。下田からは、顕彰碑除幕式の日に、婦人会の事業奨励金50円が納められ、翌9日には、婦人会主催の講演会において、「日本女子の任務」と題した講演も行われた。

顕彰碑建立の翌年、昭和11年3月には、以降毎月顕彰碑周辺の清掃作業を行うことが決められた。婦人会資料には、昭和11年5月5日の顕彰碑周辺の清掃作業の記録および写真が残されている。清掃はその後昭和16年まで記録され、戦後再開している。現在の顕彰碑周辺も手入れが行き届き、美しい緑に囲まれている。(図1、2、5)。

昭和11年10月下田逝去後、12月6日に岩村の盛巌寺において分骨式(埋骨式)が営まれ、乗政寺山藩主墓地の平尾家墓所に平尾壽子理事長によって埋葬された。婦人会記録には、遺骨の出迎えから来賓の見送り、約300人分の食事の用意など、式全般にわたって婦人会が活躍したことも記されている。

さらに、昭和13年には同墓地に下田の墓所が完成し、同年6月8日に三年忌の法要が営まれた際には、婦人会役員が参拝したと記録されている(注5)。顕彰碑周辺の清掃に、墓所の清掃が加わった時期は定かではないが、おそらく新たな墓所が完成したことを機に始まったと思われる。

おわりに

婦人会資料は、平成16年の市町村合併による同会解散後も大切に保管されてはいたものの、ほとんど人目に触れることはなかった。今回の調査をきっかけに、改めてその活動記録が岩村町の歴史を証言する貴重な資料であることも明らかになった。下田先生の岩村訪問を契機として、当時の女性のあり方に多大な影響をもたらした先生の存在を誇りに思い、大切に守ってこられた婦人会の方々の熱意と地道な活動は、現在もなお受け継がれている。

図5 岩村町婦人会建立の示標

次回は聞き取り調査を中心に、戦後から現在までの岩村町婦人会および岩邑うた子会の活動について報告したい。

注)

1. 『下田歌子先生傳』故下田校長先生傳記編纂所 1943 p.765
2. 石碑の価格を現在に換算するのは容易ではないが、以下例として挙げる。
   ① 企業物価指数による換算(戦前基準指数を使用)
   735.4(平成26年)÷0.994(昭和10年)=739.8(倍)
   80円×739.8=59,184円
   (日本銀行HP「教えて!にちぎん」参照)
   ② 公務員の初任給　昭和12年 75円
   白米10キロの値段　昭和10年　2円50銭
   (週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞社 1988)
3. 石工については当研究所研究員鈴木隆一氏のご教示による。
4. 高橋晴子『年表近代日本の身装文化』三元社 2007 p.372-373
5. 三年忌の法要の月日は『実践女子学園100年史』学校法人実践女子学園 2001 による。ただし、婦人会資料では7日となっている。

明治・大正・昭和の著作で知る、下田歌子先生のバイタリティー
――板垣弘子名誉教授編『下田歌子著作集　資料篇』を中心に――

下田歌子研究所事務室
奥島　尚樹

下田先生は膨大な著作を残されましたが、その一部は生前に出版された『香雪叢書　下田歌子著作集』全5巻（実践女子学校出版部 昭和7、8年刊）及び板垣弘子編『下田歌子著作集　資料篇』全9巻（実践女子学園、平成10～14年刊）に集大成されています。

後者の『下田歌子著作集　資料篇』は、短期大学板垣弘子教授が、学園の「特色ある教育研究」による助成及び学園卒業者戸野原須賀子氏の支援を受けて編集出版したものです。明治17年「女學新誌」掲載の和歌を嚆矢として、昭和6年までの婦人総合雑誌・女学雑誌類15誌に掲載された下田先生の和歌詠草、読み物、講演概要を収めています。本書出版に際しては、各機関所蔵の原本から複写して収録されており、下田先生の著述の原典として大変貴重なものと言えます。

「愛國婦人」
大正13（1924）年9月号
（第509号）
・下田歌子
「婦人と對外思想」

全9巻の収録雑誌は、次のとおりです。

第1巻　「をんな」「なでしこ」「大和なでしこ」
第2巻　「愛國婦人（上）」
第3巻　「愛國婦人（下）」
第4巻　「日本婦人（上）」
第5巻　「日本婦人（中）」
第6巻　「日本婦人（下）」
第7巻　「婦人世界（上）」
第8巻　「婦人世界（下）」
第9巻　「女學新誌」「日本之女學」「女鑑」「太陽」「日本乃家庭」「女子之友」「少年世界」「女學世界」「ムラサキ」

本研究所は、平成27年に『下田歌子著作集　資料篇』から索引を作成いたしました。作成した索引は、先生の著述が多くの人々の目に触れるよう工夫していきたいと考え、下田歌子電子図書館での公開を検討しています。

今回『下田歌子著作集　資料篇』から作成した索引を用い、年次ごとの著述の本数を集計してみたところ、表1のようになりました。本学園創設前後の著述・講演活動の数には目を見張るものがあります。学園の現在は、この下田先生のバイタリティーに依るところが大変大きいのではないかと思われます。女子教育あるいは中等教育・高等教育に対する熱い想いや家庭及び家庭教育についても、さまざまな文章のなかで述べられており、その内容には現在にも通ずるものがあると思われます。

文章は、旧漢字・旧仮名遣いのオリジナルですので、若干読みにくい面もありますが、実践女子大学・短期大学部図書館、中学校・高等学校図書館及び当研究所で所蔵しておりますので、ぜひご一読ください。

なお、冒頭にも述べたとおり、下田先生の著作は膨大なものがあり、香雪叢書や著作集にも収められていない単行本や雑誌掲載の短文、講演録など多数に及んでいます。本研究所は、下田歌子先生の著作及び論考が掲載されている雑誌原本の収集に力を注ぎ、新たな著作の発掘を以て、データを補足していきます。また、学園が作成しあるいは収集した様々な書類・雑誌等資料の索引・目録、記事一覧等の作成にも注力しています。

「日本婦人」
明治33(1900)年4月
(第6号)

- 下田歌子
「女子耐忍の範圍に就きて」
妻のため
少女のため
「つれづれ艸講義」

「ムラサキ」
明治38(1905)年
第4号

- 下田歌子
「社會の花、家庭の實」

「婦人世界」
明治43(1910)年
第5巻第1号

- 下田歌子
「私が洋行中に見たる西洋人の美點」

表1　下田歌子先生著作数一覧(「下田歌子著作集　資料篇」による)
(「下田歌子著作集　資料篇」全9巻に収録されている著作の数を年代毎に集計)

掲載年	著作数	
明治17(1884)年	0	宮内省御用掛
明治18(1885)年	0	華族女学校開設 幹事及び教授に任ぜられ、校長事務を代行する
明治19(1886)年	0	華族女学校学監兼教授
明治20(1887)年	0	「国文小学読本」全8巻編纂刊行
明治21(1888)年	3	
明治22(1889)年	3	「和文教科書」全10巻の編纂刊行
明治23(1890)年	0	
明治24(1891)年	0	
明治25(1892)年	1	
明治26(1893)年	1	「家政學」上下2巻を刊行
明治27(1894)年	0	
明治28(1895)年	5	華族女学校学監に復職
明治29(1896)年	9	常宮及び周宮内親王御用掛を拝命
明治30(1897)年	29	華族女学校教授を兼務
明治31(1898)年	48	帝国婦人協会を結成し会長となる
明治32(1899)年	37	帝国婦人協会私立実践女学校並びに女子工芸学校を創設 「泰西婦女風俗」を刊行、帝国婦人協会雑誌「日本婦人」発刊
明治33(1900)年	73	帝国婦人協会新潟支会設立、裁縫伝習所(私立新潟女子工芸学校と改称)、現在の新潟青陵学園を開設
明治34(1901)年	86	
明治35(1902)年	88	桜同窓会発足 宮内省の常磐松御料地に実践女学校校舎の建築に着手
明治36(1903)年	65	「女子自修文庫」全5冊を編纂
明治37(1904)年	58	
明治38(1905)年	37	
明治39(1906)年	50	「女子の修養」刊行
明治40(1907)年	31	学習院女学部長を辞任
明治41(1908)年	55	実践女学校・女子工芸学校を合併して私立実践女学校と改称
明治42(1909)年	19	私立実践女学校を私立帝国婦人協会実践女学校と改称

掲載年	著作数	
明治43(1910)年	27	「婦人常識の養成」刊行
明治44(1911)年	16	「女子三体消息文」編著、「婦人礼法」刊行
明治45(1912)年	12	
大正元(1912)年	9	
大正2(1913)年	16	「日本の女性」刊行
大正3(1914)年	18	
大正4(1915)年	34	
大正5(1916)年	30	「家庭」「女子の礼法」「結婚要訣」刊行
大正6(1917)年	17	
大正7(1918)年	24	
大正8(1919)年	29	
大正9(1920)年	25	
大正10(1921)年	33	
大正11(1922)年	16	
大正12(1923)年	16	関東大震災
大正13(1924)年	14	
大正14(1925)年	13	
大正15(1926)年	15	
昭和元(1926)年	0	
昭和2(1927)年	7	
昭和3(1928)年	3	
昭和4(1929)年	2	
昭和5(1930)年	16	
昭和6(1931)年	12	
昭和7(1932)年	0	「香雪叢書」第1巻を刊行
昭和8(1933)年	0	
昭和9(1934)年	0	「香雪叢書」全5巻刊行、 「源氏物語講義」首巻刊行
昭和10(1935)年	0	
昭和11(1936)年	0	「源氏物語講義」第1巻刊行
	1,103	

下田歌子研究所 研究員

（平成28年4月1日現在）

所　　長	湯浅　茂雄	
主任研究員	伊藤　由希子	
研　究　員	愛甲　晴美	久保　貴子
	鈴木　隆一	関　登美子
	竹内　整一	松下　寿久
	横山　幸司	

今年度の活動予定

下田歌子研究所は、下田歌子先生の建学の精神を踏まえ、現在・未来において女性たちがよりいきいきと活躍できる社会の構築を目指し、それを資する施策・思想を社会に発信していきます。女性に関わる諸種の課題に取り組んでいる機関や他の女子教育機関等との連携事業や下田歌子の思想・事績研究、学園の歴史研究、資料収集、アーカイブ化、創立120周年学園史補遺版の編集などを実施しています。

6・7月	第14回下田歌子賞募集記念　特別展示、特別講演 場所：愛知県東海市「東海市芸術劇場」2階　細井平洲・童門冬二記念 嚶鳴広場
9月	夏季セミナー「学長と行く、学祖故郷の旅」学長室、下田歌子研究所共催 学生向け
	下田歌子研究所研究会　開催
10月	常磐祭（渋谷キャンパス）参加
	「下田歌子研究所ニューズレター　第8号」発行
11月	常磐祭（日野キャンパス）参加
	文学散歩開催 学生向け
2月	『下田歌子研究所年報 女性と文化 第3号』刊行
3月	「下田歌子研究所ニューズレター　第9号」発行

第14回「下田歌子賞」募集記念 特別展示及び講演会のお知らせ

全国からエッセイ及び短歌を募集する第14回「下田歌子賞」を記念して、右のとおり、東海市において特別展示及び講演会を開催する運びとなりました。
テーマ「家族」に因み下田先生の曽祖父・他山及び祖父・東條琴台の肖像画賛等を展示します。皆様のご来場を心よりお待ちしています。

○下田歌子賞については本学ウェブサイトにて詳細をご確認いただけます
http://www.jissen.ac.jp/idea_and_tradition/shimoda_utako/prize/index.html

特別展示

会場　細井平洲・童門冬二記念「嚶鳴広場」
（愛知県東海市「東海市芸術劇場」2階 名鉄太田川駅西口前）

期間　平成28年6月27日（月）～7月20日（水）　9:00～22:00

講 演 会

演題　「揺りかごを動かす手は、世界を動かす」
実践女子大学下田歌子研究所長　湯浅 茂雄

日時　平成28年7月9日（土）　14:00～　（定員70名 ※先着順）

会場　細井平洲・童門冬二記念「嚶鳴広場」
（愛知県東海市「東海市芸術劇場」2階 名鉄太田川駅西口前）

申込　東海市教育委員会　社会教育課
電話：052 - 603 - 2211　（7月1日締切）

『ニューズレター』No.07
発行：2016年6月27日　編集・発行所：実践女子大学 下田歌子研究所
〒191-8510　東京都日野市大坂上4-1-1　電話・FAX：042 - 585 - 8945　E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp
印刷：日野テクニカルサービス株式会社